

藤岡明義

敗残の記

玉碎地ホロ島の記録

創林社

藤岡明義

敗残の記

玉碎地ホロ島の記録

創林社

筆者軍歴

大正4年生れ。

昭和15年、第二補充兵として日中戦争に応召。宜昌—長沙間の最前線戦闘部隊(歩兵第三十七聯隊)に所属、各地を転戦。

昭和17年、帰還。召集解除(陸軍上等兵)。

昭和19年、太平洋戦争に再度応召。フィリピン派遣軍(独立混成第五十五旅団)に編入され、ホロ島守備に当る。上陸して来た米軍と闘い、陸海軍合せて6000名全員戦死したと報ぜられた。

終戦後、生き残った80名が救出された。

昭和22年、帰還(陸軍兵長)。

現在、三和シャッター工業株式会社勤務。

現住所、東京都中野区東中野5-23-6-513。

敗残の記

一九七九年六月一七月初版発行
一九七九年八月一五日二刷発行

定価一五〇〇円

著者 藤岡明義

発行者 宮西忠正

発行所 (株)創林社

〒101東京都千代田区三崎町二の一二の二

電話(〇三)二六五—八〇七七

振替東京〇—二六五四五

須藤印刷 大日製本

0095—0107—4281

AKIYOSHI FUJIOKA

序

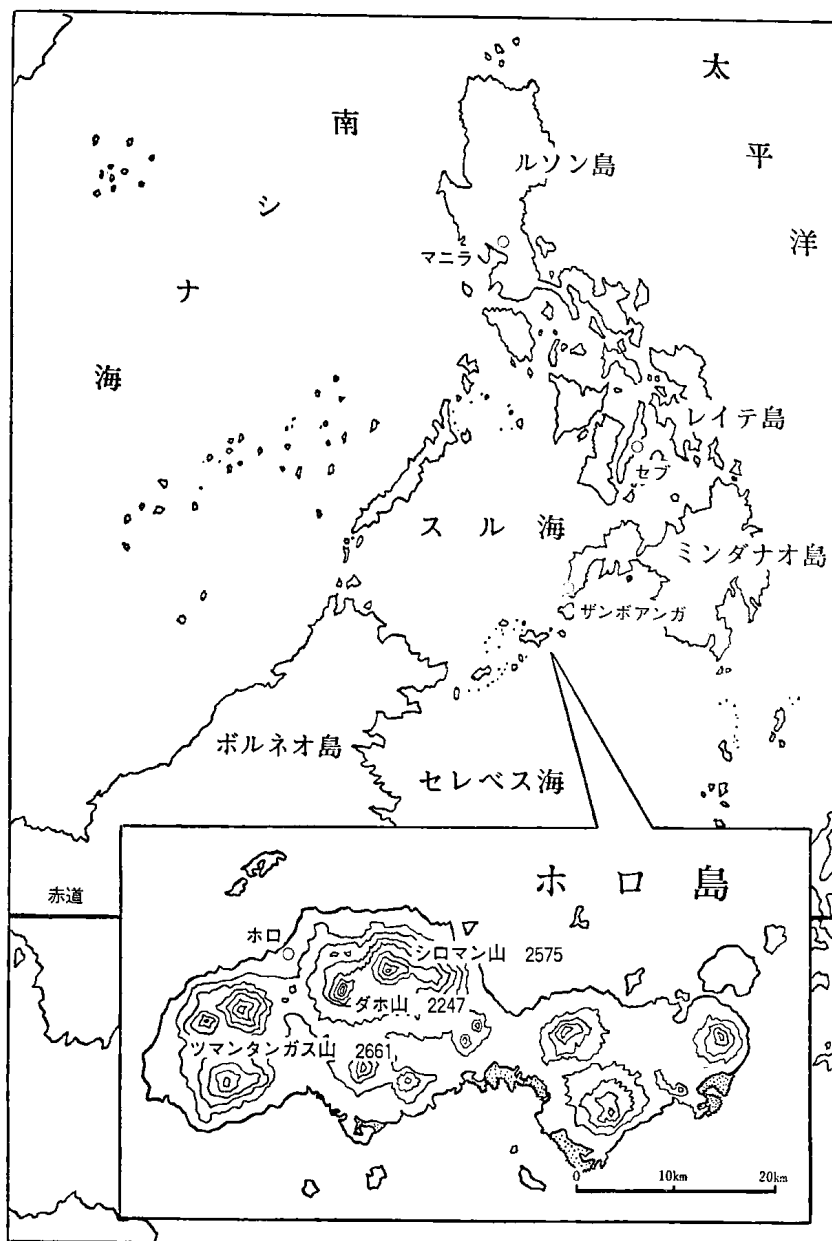
此の一篇は、私がフィリピンの収容所を転々する間に、我々の体験が、他の戦線に比べて、かなり特異なものであったと感じたので、主として特異的な部分を、印象のさめやらぬまま、思いつくままに書き綴ったものである。

当時、書いたものは、日本へ還送される際、すべて米軍に取り上げられると聞かされていたので、持ち帰れるとは思ってもやらず、また、人に見せるべきものではないので、断片的、主観的で、随ってこれは、あくまで私の備忘録である。

三十三年目を迎えるに当り、感ずる所あり。この一篇を、ホロ島のツマンタンガス並びにシロマンの山々に、今もなお知る人もなく散在し、ジャングルの腐土に埋まっている、六千名の白骨に捧ぐ。

昭和五十三年十二月

(注) 原文では、地名、人名等が略字になっている箇所があるが、本書では、出来る限り正名に直した。



目 次

はじめに 9

一、野呂邦暢氏との出会い 9

二、ホロ島という処Ⅱ公認の玉碎地 11

三、ホロ島のモロ族と其の後日譚 13

講演会でのハプニング 13

ゲリー・クーパーの古い映画 14

遺骨拾集困難の地 16

暴れ廻るホロ島のモロ族 17

人質になった日本女性 18

停戦会議席上の皆殺し 19

本篇 21

一、任地まで 23

二、任地という処 45

三つの王国 45

陣地構築と雨 46

沈没船から引き揚げた野砲 46

給 与 47

中隊最初の犠牲者 48

米軍レイテに上陸す 48

モロ族 49

続く犠牲者 52

モロ討伐 53

虱 54

夜 55
タカ

空襲 56

最悪の事態 56

三、敗残の記 59

来るべき日 59

敵上陸 60

敗戦 60

幽霊機 63

切込み 63

狂った隊長 65

山頂に極まる 66

米軍の攻撃に代ったもの 69

牛 69

塩 70

遺品 71

トバ屋の少尉 72

個人世帯 72

輕機分隊の受難	74
転進(Ⅰ)	77
転進(Ⅱ)	106
さよなら	115
徴発	117
水	119
死場所	119
自決	120
島外連絡	122
孟蘭盆の月	123
大森一等兵の死	126
投降	128
友軍誘出	158
同一分隊員	164
四、収容所に想う	169
敗残兵	169

プロパガンダ	170
拾った人生	170
限りなき前進	171
電 燈	172
ホ ロ 島	172
十一月説	173
批判の精神	174
酬 ^{ぐい}	175
チェスターフィールド一本	175
生の贅沢 ^{ぜいたく} (其の一)	176
敗戦兵同志	176
S小母さんへの便り	177
えらい人	178
「ライフ」紙の報道	179
私 ^し 物 ^{ぶつ}	180
ピンタ教育	181
進歩を嫌った社会	181

台湾人	182
敵の被服は着ない	183
同じような人	184
M島の司令官	185
捨てられぬ夢	185
復員者の自覚	187
生の贅沢(其の二)	187
日の丸の飛機の残骸	188
あとがき	189

はじめに

一、野呂邦暢氏との出会い

昭和五十二年十一月二十五日、日本経済新聞の文化欄に、野呂邦暢氏の、概要次の如き一文が載った。
「私は、戦争に関する文献を、公刊私製を問わず、手当たり次第に蒐集している。そのため、家の根太が傾いて来る。今では一冊の本を手に入れるごとに、その重みが気になる位である。」

これら夥しい文献の中に、特に無名の人の書いた私本や記録にして、すばらしいものがある。それらは、巨額の経費を費して編纂された公刊の戦史には、決して見ることでできない「戦争の真実」というものを教えてくれる。

たとえば、今、私の手もとにある、藤岡明義氏の「敗残之記」は、ワラ半紙に、ガリ版刷りの粗末な文献だが、私はこれを大阪の古本屋で手に入れた。著者の住所はない。フィリピン近傍の日島が舞台なのだが、

H島が正確にはどこなのか、まだつきとめていない。モロ族のいる島ということだけは分っている。……生の極限を彷徨した人の文章は、巧拙を問わず、ある種の無量の思いがこめられている……」

というものである。

万巻の戦争文献の中から、私のこの記録をとり出し、特別の評価を戴いたわけである。

この新聞を読んで、「これは、君の事ではないのか」と、あちこちの友人知人から連絡を受け、私はすっかり面喰ってしまった。それは、どうして、それが氏の手に入ったのかという不審感であった。

序文にあるように、これはあくまでも自分の思いのままに綴った備忘録であり、且、日本に持ち帰れるとは思ってもよらず、また人に見せるべきものではなかったのに、幸にして、持ち帰ってみると、一生の記念にと戦友達が熱望したので、ワラ半紙に、ガリ版刷りにして、数人の戦友に分けたことがあった。「本」などというものではない。それが、どうして古本屋などにあったのか、今もって分らない。

それにしても、その道の第一人者の眼にとまり、大いに評価されたのであるから、面映かったと同時に、
《真実とは、こんなものかと思う》との一言に胸がつまった。

次に、「そんなものがあるなら、俺にも見せろ」との、人々の催促に会って躊躇した。何となれば、知る人ぞ知る、であって、壮烈なる戦闘記録などと異なり、じめじめとした敗残の私記録など、一般的には退屈で幻滅に違いないし、一方世の「良識人」のヒンシュクを買い、場合によっては、関係者の恨みを買うのが落ちとの配慮からであった。

それから一年を経過した今日。あれから丁度三十三年目に当ることを契機に、感ずる処あり。

眞実は眞実であり、眞実は覆えないとの信念と、未だ、まともな遺骨拾集すら出来ないホロ島で、空しく惨めに死んで行った、六千人の——此のまま行けば、永遠に、誰にも語られずに終るであろう——悲しい声の代弁となり、彼等の霊への供養にもとの発願から、之を発表することにした次第である。

二、ホロ島という処＝公認の玉砕地

最近のこと、生れて初めて靖国神社に参拝し、宝物館の入口で入場券を買っていると、目の前に大きな地図が掲げていて「日本軍進攻の図」とある。

我が任地ホロ島は、小さい島であるから、こんな地図にも載るまいと思いつながら、其の付近に眼をやると、ちゃんと「ホロ島」と書いてあり、然も、其の字の上に、赤い丸印がついている。この印は何かと、隅この注釈を読むと、「赤い丸印は、玉砕地」とある。

(注) 後で気が付いたのだが、ホロ島の位置を明示するため、わざわざ島の大きさを拡大して描いてあったのだ。アッツ島や硫黄島等々、世に有名な戦場と並んで、ホロ島がある。フィリッピンでは、マニラとホロ島だけである。レイテ島やガダルカナルにすら、赤い印は付いていないのに……。

比島戦線の惨状については、既に多くの人々によって、語られ知られているが、「玉砕」と公認されているのは、ホロ島守備隊と、マニラ守備隊だけということになる。

そう言えば、終戦後、妻が復員局へ私の消息を聞きに行ったら、上席の人が厳肅な顔をして出て来て別室に案内し、「御主人の部隊は完全に玉砕してしまつて、一人の生存者も居りません」と宣告されたとのこと。比島七千余島と言う。一口にフィリピンと言っても、ルソン島、セブ島、レイテ島、ミンダナオ島等、七千幾つかの島から成っている。

敵に制空制海権を握られてからは、各島の日本軍はそれぞれに孤立した。従つて同じ比島戦線と言っても、その戦況は各島によって著しく相違する。

ホロ島は、フィリピン南端、ミンダナオ島とボルネオを結ぶ線上に、ボツンと蚤の子のように位置し、東西六十軒、南北に平均二十軒という孤島である。

此の島は、もと米軍の飛行基地であつたのを、太平洋戦争の緒戦に於て、日本海軍が上陸占領し、日本軍の飛行基地として海軍部隊が警備していた。（日本軍に敗れた米軍の敗残兵が、飛行場の後背にそびえ立つツマンタンガス山に追い上げられ、モロ族に首を切られて全滅したと、聞いていた。）

やがて米軍の反攻が始まり、南から跳び石伝いに北上し、比島奪還の気配が切迫するに当り、彼等が最初に足かけるとすれば、それは一番南端の孤島、飛行場もあるホロ島になる公算大なりとの判断から、急遽陸軍部隊を送つて、此処の戦力を強化し、此処で米軍を要撃して、其の比島奪還を阻止せんとしたのである。

其の重要な任務が、遠く離れたルソン島に居た第十四軍隷下の独立混成第五十五旅団（通称菅兵団。兵団長は鈴木鉄蔵中将）に降つた。構成各隊の出身地は、東海、北陸、近畿、山陽地方に亘つていた。

斯くて島には、陸海軍部隊の外に、航空通信隊や、付近で撃沈された船舶の船員などがいて、日本軍としては約六千名。それが遂に、僅か八十名になり果てるまで、終戦も知らずに戦い続け、最後には、人間とも

思えない姿で、ジャングルの中から這い出して来たのである。それがホロ島である。

三、ホロ島のモロ族と其の後日譚

モロ族、特にホロ島のモロについては、本篇に或る程度触れてあるので、重複を避けるが、其の特性を知らない、何故日本軍が斯くも惨めな状態に陥り、比島戦線でも最も悲惨な結果になってしまったかの理解が困難であろう。

モロ族は、付近の島々にも住んでいるが、ホロ島がその本拠地であり、ホロ島のモロが最も純正なのである。

ホロ島のモロは、すべて熱烈なる回教徒であるが、其の排他、背信、精悍、寧猛、残忍性については、実際に体験したものでなければ、到底信じられない。其の实情は本文に譲るとして、ここに二、三の後日譚を紹介して置こう。

講演会でのハプニング

或る収容所に居た時の話。毎日労働が続き、然も何時日本に送還されるのか分らぬ焦躁と無聊を紛らわす為、夕食後演芸会などが催されることがあった。

ホロ島の生き残りが一人居るといので、その戦闘模様を話すよう私が指名された。

聴衆は同じ比島各戦線の生き残りだし、今更戦争の話でも無からうと固辞したが、ホロ島は特別だから是非やるよう推薦する者があったので、一夕講演会が催された。約四十分ばかりに要約して話したが、モロ族との闘いについては、皆が半信半疑の様子で、すっかり白らけた空気になり、話した私は全くやるせない気持であった。すると、突如聴衆の中から一人の中年の男がスタスタと壇上に登り、そして斯う言った。

「自分は長年フィリピンに在住して居り、今回の戦争に現地召集を受けたものであります。只今の藤岡氏の話をきいて、諸君は恐らく、そんな馬鹿げたことがあるかと思つて居られるのではないでしょう。然し自分には良く理解が出来、ホロ島のモロ族ならば、さもありなんと手に汗して聴いていました」と。それから彼は未だ此の戦争の始まつていない頃、ホロ島を訪れた時の体験、常識では考えられないようなモロ族の恐ろしさを、実例を挙げて説明し、私の話の可能性を立証してくれた。聴衆は、これによって漸く、そんなことがあるのかなあ、ということになり、私はやっと面目を施したという一幕があった。

ゲリー・クーパーの古い映画

如何に瘦せたりとは言え、最後は肉弾戦を唯一の売り物にしてきた日本軍が、あんな野蛮人に、手も足も出なくて、完膚なきまでに殺戮されたことは、何としても情けなく割り切れない気持で居た帰還後でもない昭和二十三年頃、戦前の古いアメリカ映画で、ゲリー・クーパー主演の「暁の討伐隊」というのが上映された。